



も どり と 人 婦

號 壹 第 卷 六 第

も どり

白しろいめ雀すずめ

やまとの翁

これは西洋でのおはなし。むかしくまづある處に、田た五ご作さくといふ一人ひとりの農夫ひやうしやうがありました。たさ。家うちには可成かなりお金かねもあり、親おやの代だいからの田ただの畑はたけたのも大分だいぶ

持って居たのですが、田五作は性質大の朝寝坊で、其上怠けも  
 のとき居ますから、田や畑のものは年々收穫が減つていきま  
 すし、牛や馬などの育ちも悪くなりますし、今では大分身代が  
 へっていつて、もう五六年もたてば、丸で一文無しになつて仕  
 舞ひ相になりました。

で、親類だのお友だちなどは、いろく心配して時々田五作に  
 つては「そんな風ではいかんじゃないか」といつても見ましたが、  
 田五作は一向無頓着で、相變らずの朝寝坊、相變らずの怠け者で  
 したから、皆は「田五作といふ男は、氣の毒なもんだが、あれ  
 ではとても見込がない」といふので、夫からといふものは、誰  
 も彼も見限つてしまつてもう何ともいつてくれるものもなくな

りました。

所が友達の中になつた一人、稲吉といふ男、可愛相に根が人のよい正直者の田五作だ、何もそう見限つたもんじやない



といふので、その年の暮に、一度田五作の家を尋ねました丁度天気もよいので、二人は裏の畑へ出て、大きな木の下に座って

いろく世間話をして居ましたが、稲吉は、ひよいと頭を上げて、木の上の方を見ると、雀が五六羽、枝に留って、しきりにちゆーく囀づって居ました。

「一体あの雀といふ小鳥は、あれで中々狡猾なんだ、そして畑のものを荒らすことはこの上なしときて居る上に、蕃殖するのが馬鹿に早いのだから耐らない」

稲吉がこういって、田五作の顔を見ると、田五作は心の中で「はてな、それでは、畑のものが、近頃だんぐ減っていくのは、なる程、ひよつとかすると、この雀どもがきてあらすからかもしれない」

と、黙って考へて居る、すると稲吉は、ふと思ひだした

様な調子で

「時に田五作さん、君は白い雀つてのを見たことがありませんか」と問ふと田五作は不思議相な顔付きで

「白い雀つて見ないな、大低の雀は、そう、ざつと茶色の様ですぜ、白い雀なんて居るかしらん」

と答へると、稻吉は

「いや、僕も見た事はないのだが、實際居るといふ話ですよ、現に、この近所へも来て居るといふとで……然し、そいつは毎年一羽づゝしか出ないし、その上他の雀共に見付るとひどくいぢめられるもんだから、毎朝早く巢を飛び出して行て餌をさがして、すぐ巢に歸つてしまふので、中々容易に見つからん。そこ

でこの白い雀を見つけた人には、思ひがけない福が授かるといふことじやから、僕はこれから、そいつを見付け出さうと思つて骨を折ってゐるんだが……」

「へ、へ、そりやめづらしい話だなあ、僕も、一っ見付けたいものだ」

と、田五作は答へると、稻吉は

「じゃ、君これから二人で見つけくらをしようじやありませんか」

「うん やって見ませう」

といふので、其日はそんなり分れました。

さて其翌朝、田五作はめづらしく疾うから起きました。「なんで

も稻吉君よりか先に、白い雀を見つけたいもんだ」といふので、寒いにも構はず、ぐるっとやしきのまわりを見廻ってやがて、裏の畑の方へ出て、あちらこちらと、方々をさがして見たが、白い雀の影さへ見えない。

「あゝあ、この寒いに馬鹿を見たわい」と、そろく家の方へひっかへしてくると、お日様はもう空に高く上って居て、近所の子どもなどは、大勢がやゝつれたって學校へ行かうとして居るに、自分の家丈は、まだ戸もあけないで、誰一人起きてゐるものもない、田五作はなんだかいましくくってしようがなくなりました。

そのうちに、下男が一人麥俵をかついで、裏口から出て來たの

で、田五作は、

「多分水車場へ行くんだらう、夫にしても、こんなに遅くまで寝て居るとは怪しからん」と思ひながら、そーっと、後をつけて行って見て驚いた。下男は水車場へは行かなくって、さっさと居酒屋の方へ行く、この居酒屋といふのは、かねて、下男がたびく飲みに行つて、随分酒代の借金が出来て居るので、其借金の埋め合はせにと思つて、今この麦俵をそこに持つて行かうとして居たのであつた。田五作は、叱驚してすぐ追っかけて行つて、その麦俵をとり戻しました。夫から家へ歸つて來ますと今度は下女が牛乳桶を片手にさげて、牛小屋から出て來りました。「どうするのかしらん」と思つ





春雪

て、そーっと見て居ると、下女は牛乳桶をさげて、さっさと隣の家へ行く、田五作は不思議に思つて、尙黙つて、窓から見て居ると、これは驚いた。この下女は、毎朝主人の知らぬ間に、主人の牛乳を黙つて、隣りの家へ賣つて居たのであつた。

そこで、田五作は大急ぎで家の中へかけこんで行くと、女房さんば、高いびきでまだぐーくと寝て居ます。

「おい／＼早く起きないか、こんなに朝寢坊をするから、家の身代が減つて行くのだ」

といつて、大聲でおこして、さて、今見たことを話しますと、女房さんも「まあ」といって驚いて居ます。

それからといふものは、田五作は毎日／＼朝早くから起きて、

下女や下男を畑へ仕事にやり、自分は、白い雀を見付けるのに  
一生懸命になつて居りました。

夫から十日許りたつと、お正月になりましたが、田五作の一生懸命になつて居た白い雀は、どうしたものか、とうく見付かりませんでした。

で、田五作も、その事はもう思ひきつてしまつてたゞ、まい朝下女や下男と一所に疾うから起きて働くこと丈けをやつて居ましたが、其おかげで、減りかゝつて居た身代が、また、だんく増してくるようになりました。

すると、ある日のこと、稻吉が、お正月のお禮にやつてきて、まづ新年の御祝儀をのべて、それから

「どうだ君、白い雀は見つかりましたかな、……」  
と笑ひながら尋ねました。すると田五作は、ちよつと頭を搔きながら

「やあ、あれは、とうく見っからなかったか、然し君喜んで下さい、福丈は授かりましたよ、去年までの僕の朝寝坊がやんで、朝起きになつたお蔭で、身代のよくなつたのは全く君が知らせてくれた白い雀から福が授かたんです」  
といつて、大層お禮を申しましたとき、めでたしく